

2012年9月。サラッとした空気のメダン空港に、臙脂色のポロシャツを着た日本の若者たちの姿があった。その背中には「Groo've」の文字。遠く離れた広島からやって来た彼らは、このインドネシア・スマトラ島東部の都市で家を建てようとしていた。

「人種、宗教、国籍なんて関係ない。みんなで響き合ってもっとハッピーになろうよ！」若者たちのそんな熱い思いのもとにボランティアサークル「Groo've」は発足した。同年7月のことだ。

Groo'veの代表を務めるのは広島工業大学2年・吉田泰己さんだ。大学生活に物足りなさを感じていた吉田さんは兄の勧めで2012年5月に初めて海外で家を建てるボランティアに参加した。彼の初任務はフィリピンでの集合住宅の建築。現地に到着してまず、道端で息絶えている人や、着る服がないために裸で歩き回っている子どもたちがいることに衝撃を受けた。他国の貧困地域の厳しい現状を目の当たりにし、なにも知らずに日本で恵まれた生活を送っていたことが恥ずかしくなった。そんな彼に勇気をくれたのは、現地の子どもたちの純粋な笑顔だった。日本の伝統的な遊びを紹介すると、子どもたちは大喜び。現地の人々との交流を通して吉田さん自身が元気になった。

「なんとしてもこの活動を広めなくてはならない」

フィリピンでの経験に吉田さんは突き動かされた。帰国して間もなく、仲間とともに新たなボランティアサークル作りに奔走。

「ボランティア活動に大学の偏差値は関係ない。いろんなバックグラウンドを持った人間同士が同じ目標に向かって響き合いながら頑張れるサークルにしたい」そんな思いから、広島県内の様々な大学を回って参加を呼びかけた。ビラ配りをしたり、説明会を開いたり、地道な努力の結果徐々にメンバーは増え「Groo've」は発足した。

インドネシアにでの約3週間の滞在中2軒の家づくりに携わった。メンバーのほぼ全員が家を建てることに関してまったくの初心者だったにも関わらず、作業がスムーズに進んだ背景には現地の人々の温かい協力があった。現地の大工からのアドバイスはもちろんのこと、現場付近に住む地元住民も毎日彼らのもとに足を運んで応援してくれた。自分たちがこの人たちを助けるつもりで来たはずなのに、いつの間にか自分たちのほうがインドネシアの人々の優しさに助けられていることに気付いた。

貧困地域を訪ねたとき、ひどく汚れた川に衝撃を受けた。その川の水を現地の人々は生活用水として利用しているという。

もう一つ彼らの心に焼きついた光景がある。帰り際、ある少女がGroo'veのメンバーたちをじっと睨んでいるように見えたのだ。少女の真意はわからないが、ボランティアがすべての人にとって必ずしもポジティブに受け止められるとは限らないのかもしれないと彼らは痛感した。

Groo've のメンバーたちは決してその歩みを止めることなく、自分たちにできることを模索しながら国内外で活動が続いている。ボランティア活動は甘くない。しかしそれ以上に人と人の繋がり的重要性を知ることができる。この活動が必ず誰かにとって、そして自分にとって生きる力になると信じている。

「ボランティアとして行くんだけど、現地に行ったらその意識は全くなくなっている。家を建てたという give なはずの行為でさえ take だと思える」

神田真美